

「船頭町」子どもの頃の思い出

高司 良 恵

(会員 佐伯市宇山区)

五所明神の春まつり(その二)

(1) 五所明神春まつりの始まり

例年四月五日から七日まで、三日間行なわれている。

これは、戦前の五所明神社春季例祭が発展したものと
いってよい。

本来、五所明神社の祭事は六月と十一月の十五日に行な
われていたが、明治末期佐伯町の繁栄をはかるため、内
町・船頭町が中心になり五所明神幸祭を春の桜時に行
なうことになった。

そして、四月十五日から十七日まで三日間を祭日とし
て神幸祭を行なうようになった。

当時、内町・船頭町は消防組を中心に区制をとり、三

区(船頭町)・五区(内町)となっていたが、神幸祭供奉行
列は両町の区役員・消防組・子供組(主に長男)で編成さ
れた。役員は定紋入りの麻上下、額・まといを担ぐ者以
外の供奉員は定紋入りの羽織とはかま、手に扇子をもつ
た。

白坪・中村は五所社地元で、前代から神幸に奉仕し、
白坪組は「杖踊り」、中村組はお槍・お弓・お旗の奉仕
に、赤熊をつけて太鼓の踊り打ちをした。

大正の中頃から、二区(新道・新屋敷・六区(三町)が
供奉に加わり、佐伯検番の芸奴も屋台を列ねて神賑行列
に加わった。そして、町内各所に舞台がかけられ、祭三
日間の夜は芸達者な町民の演芸披露や芸奴たちの手踊
り、仮装隊のドンタク囃子などで町内はわきたち、見物
の人波で賑わった。

大正が昭和となり、経済界のパニック騒ぎで、年中行
事にも冷水がかけられるようになったが、それでも、昭
和六年には佐伯海軍航空隊予定地となり、やがて建設が
始まったので、両町商店街が中心になって五所社春祭も
一応の賑わいを見せたが、次第に先細りの状態で、戦時
体制に突入し、こうした祭り行事は忘れられた。

(2) 子どもの頃の春まつり

学校が春休みになると、船頭町の男の子五年・六年生は祭囃子の練習に入る習わしがあつて、町内の先輩格のおじさん達がその指導をしていた。練習はクラブで下本丁のはずれに大きな二階建てのがらんとした建物で、一階には鮮魚商を営む矢野のばあちゃんがあった。道を隔てたその前は、黒木商店(乾物店)、その隣は松の湯と大賀の籠屋さんがあつた。※クラブは現代の地区公民館にあたる。現在、あまくさ食堂・親和商会の前で幹線道路にも面し、貸店舗になつている。

囃子は太鼓や鐘に合わせてノチキリリッコンコンノコンチキリリッコンコンノ……ソレと力強い掛声でリズムカルであつた。銭湯の松の湯に浸りながら、クラブから聞こえてくる囃子にうきうきした。風呂を出て、すぐ前にあるクラブに立ち寄つた。うす暗いぎしぎしした広い階段を上つて格子の欄干の間から、そつと練習の様子を覗き見した。いつも何人かの子ども達が見に来ていた。男の子達みんな一生懸命受持ちの太鼓や鐘の打ち方を習つていた。夜道を帰りながら、遠ざかる囃子に合わせながら振りを真似しながら帰つたものだった。

練習も日を追つて上手になつていった。ほとんどの子が船頭町の商家に生まれ、船頭町の気風を受け継ぎ、力強い連帯感と活気が漲り自信と誇りに満ち満ちていた。小学校六年を卒業すると、一応その任が終わつた。

祭りが近づくと、母は兄達のまとう法被を出して準備をしていた。黒の法被に白ズボン、裾はゴムで絞り七分位の長さでくつ下を履いていた。黄色の腰紐・赤の鉢巻、法被には船頭町の区紋が染め抜いて衿には漢字で、白で「船頭町」と記されていた。当時、ほとんどの男の子は、くりくり坊主だった。

祭りの当日は、まだうす暗い町内を触れ太鼓が廻つた。その太鼓の音に目が覚めて、じつと布団の中で聞きながらうれしくて、うれしくてたまらなかつた。その触れ太鼓は誰が廻つていたのか、その様子を一度も見ただけでなかつた。遠くから聞こえ、家の前を通るその瞬間じつと耳をすまし、遠ざかり行く太鼓の音は今も尚、しっかりと心の奥底に焼き付いている。

祭りの第一日目は、なんとといっても五所明神から出発する御神幸であつた。私達は御神幸の行列を「お通り」と言つていた。お通りは下本丁から入つて来る。祭囃子

が近づくと胸がわくわくして、家に帰り「お母さん!!お通りが来るんでー。」と弾んだ声で知らせたものだった。そのお通りの中で、子ども心に眼裏に焼き付いているのは、先導の天狗様であった。声を出してみたり、おどけた様子は、子ども達にとつては恐いと印象づけられていた。五所明神の宮司橋迫寛四郎さんが馬に乗って通った。笑みを浮かべた宮司さんは、沿道の人々に会釈を交わされたお優しいお顔は親しみを覚えた。白坪の若衆の杖踊りの行列は勇壮であった。茶色まじりの髪の毛が顔まで垂れ、長い棒には五色の紙で作った飾りがかさかさとして鳴り、通り過ぎるとはっとした気持だった。白装束に身を包んだ若者が御輿を担ぎあばれ、祭り気分をかきたてた。御輿のまわりの飾りの金具がゆれ、触れ合つて美しい音色が響いた。母はお養錢を投げて、御輿が通り過ぎるまで合掌していた。母はどんな気持で何を……と思いがつのる。お通りの行列は長く続いた。見物人もあちこちの農・漁・山村から、多くの人が両側の道にあふれていた。

やがて、待ちに待ったお囃子が聞こえ、山車が見えた。船頭町か内町かと期待感でいっぱいだった。今年はず

船頭町が一番だとその姿が見える
と、なにかしら内町とのライバル意識がすつと消え、得意な気持になった。



船頭町のシンボル山車

いよいよ山車が下本丁に入ると、囃子と掛声は最高潮に達し、山車の上で太鼓を叩く男の子は力強く、鐘の音はひびき、山車を引く男の子の掛声がマツチして「やっぱり船頭町の子はうまいなあ……」と「船頭町はいいなあ……」とその思いを深くした。子ども心に優越感でいっぱいだった。夜は家族揃って、お旅所の三の丸にお参りをした。神楽が奉納されていた。

三日目は「お帰り」で祭りの行列もなにかしら淋しさがあった。

戦時下に入り、夢を育んでくれた「春まつり」行事も中断され、軍都佐伯一色になった

【資料】 佐伯市史